

プロジェクト演習成果報告書（教員）

【情報ビジネス学部】

氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
石田 宏之	外食産業におけるロジスティクス・システムに関する研究 株式会社物語コーポレーションを事例に	P133
今井 久登	福祉施設で紙芝居	P136
今井 正文	ビジネス系学生のための情報処理資格に向けた 電子コンテンツの改善活動	P137
見目 喜重	豊橋市内小中学校の太陽光発電システム稼働状況調査	P139
五味 悠一郎	認定試験に受かるための学習環境構築と運営	P141
中野 一豊	『会計事務所プロジェクト』	P144
中野 聡	社会的企業の実証研究 サーラコーポレーションと東三河障がい者仕事センターが 展開する社会ビジネスの豊橋モデル	P145
花岡 幹明	豊橋筆プロジェクト	P148
三好 哲也	豊橋トップインタビュープロジェクト	P150
三輪 多恵子	学食応援プロジェクト by 学食おうえん団	P153
森田 和正	就業力育成プロジェクト報告書	P157
山口 満	炎の祭典支援プロジェクト	P158
吉川 優	東三河 Bible	P162

プロジェクト演習成果報告書（教員）

【キャリアプランニング科】

氏名	プロジェクトテーマ	掲載ページ
朝倉 由美子	食の伝達 「大学生コックさんのクッキング (子どもクッキング) 教室」プロジェクト	P163
	「豊橋産の野菜と米粉を使った焼菓子の開発」プロジェクト	P165
今泉 仁志	豊橋の祇園祭を考えるプロジェクト	P168
木下 賀律子	「ライスフラワー」プロジェクト	P170
千賀 博巳 中島 剛	防犯プロジェクト	P172
寺本 和子	身近な自然発見・発信プロジェクト	P173
長谷川 正志	プロジェクトテーマ	P174
細谷 邦夫	医療機関の貼り紙適正化プロジェクト	P175
村松 史子	「I ♥ ROSE プロジェクト」	P177

外食産業におけるロジスティクス・システムに関する研究 株式会社物語コーポレーションを事例に

担当 石田宏之

1. プロジェクト概要

本プロジェクトの目的は、一つ目が、株式会社物語コーポレーション(以下『物語』と略す)を事例として、食材の仕入れから各店舗へ食材が供給(納品)されるまでの『情報の流れ』と『ものの流れ』の実態を調査することにより、ロジスティクス・システムが『物語(企業)』に対して果している役割と機能を分析することである。

二つ目が、プロジェクト活動を通し、①メモの取り方・要約の仕方、②テーマの進め方、③分析力・理解力、④問題発見能力(本プロジェクトでは、これらを就業力基礎能力とする)を習得するとともに、協力企業との交渉、ヒアリング調査、施設見学を通して、①挨拶・応答態度②コミュニケーション能力、③リーダーシップ、④報告・連絡・相談(本プロジェクトでは、これらを社会人基礎能力とする)を養うことである。

調査対象企業は、『物語』(本社購買部、店舗、麺工場)、ロジスティクスの機能を委託しているワルツ株式会社(以下ワルツと略す)および株式会社キュウソー流通システムの春日井流通センター(以下 KRS と略す)である。

『物語』(本社:愛知県豊橋市神野新田町二ノ割 1)は、焼肉、ラーメン及びお好み焼レストランチェーン、専門店の直営による経営とフランチャイズチェーンを全国展開している外食産業であり、従業員数 社員 427 名 時間制従業員 3,569 名(2011 年 6 月 30 日現在)である。

『ワルツ』(愛知県豊橋市神野新田町二ノ割 1)は、カフェ、喫茶店、ホテル、レストラン、洋菓子店等へのコーヒーをはじめ、紅茶、製菓・製パンの材料、食材、器材、直輸入品の卸および小売販売並びに提案営業を行っている会社であり、フライチャイズビジネスとして「焼肉一番カルビ」、「焼肉きんぐ」、「丸源ラーメン」などを経営し、『物語』のロジスティクス機能が全て委託されている会社である。

『KRS』の春日井流通センター(愛知県春日井市神屋町字地福 1218-11)は、『物語』の食材等の保管・在庫および各店舗への配送が『ワルツ』から委託されている企業である。

訪問先日時と内容及び応対者は表の通りである。

日時	調査内容	訪問先・応対者
2011・5・25	自己紹介(各自の役割分担説明) 調査趣旨の説明	物語コーポレーション(豊橋市岩田町) 人財開発部部长 神谷さん マネージャー 河合さん
2011.6.8	次回訪問の打ち合わせ	丸源ラーメン豊川店 人財開発部部长 神谷さん

2011.6.15	購買部ヒアリング	物語コーポレーション(豊橋市)岩田町 人財開発部部長 神谷さん 購買部統括マネージャー 飯田さん
2011.7.27	ワルツヒアリング	株式会社ワルツ(豊橋市神野新田町) 統括マネージャー 河口さん
2011.9.28	KRS 施設見学	キューソー流通センター春日井営業所 上野課長さん・江崎係長さん
2011.11.16	購買部ヒアリング2回目	物語コーポレーション(豊橋市岩田町) 人財開発部部長 神谷さん 購買部統括マネージャー 飯田さん
2011.11.29	店舗見学及びヒアリング	丸源ラーメン豊川店・焼肉きんぐ花田店 人材開発部部長 神谷さん

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

2.1 指導方法

調査の方法は、①文献研究、②ヒアリング調査、③施設調査(含む写真撮影)の三つである。調査を実施する前に、まずテーマで対象とした物語コーポレーションにおけるロジスティクス・システムがどのくらいの水準にあるかを検証するための基礎知識を学ぶためにロジスティクス・システムの役割と機能を文献等で一般的な水準を整理する。その上で、調査対象企業を決定し、調査スケジュールを作成し、調査項目を作成させた。

2.2 留意点

メンバー各人に役割を決め、決められた役割・事項については、リーダーシップをとらせるようにした。また、相手先への挨拶、交渉、依頼、連絡等を電話およびメールで実施する際の注意事項を徹底し、メンバー全員ができるように指導した。

ヒアリング調査および施設調査は、指導教員が常に同伴するだけでなく、学生だけで実施させ、自発性、計画性を学べるようにした。

調査を進めるにあたって、全員でメモを取り、調査の後に全員で調査内容を確認させ、不明な点、調査し忘れた事項を整理し、再度調査を実施し事実を正確に把握するよう指導した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトについての評価

調査の目的のひとつである『物語コーポレーション』におけるロジスティクス・システムの役割と機能に関しては、当初目標にしていたレベルをほぼ達成することができ、協

力企業に対して調査報告書を作成した。

目的の二つ目である就業力の達成度を自己評価(メンバー全員の平均値)すると、本プロジェクトで設定した、就業力基礎知識および社会人基礎知識の採点は以下の通りである。

① 就業力基礎能力

- ・ メモの取り方・要約のしかた:90%
- ・ テーマの進め方:80%
- ・ 分析力・理解力:80%
- ・ 問題発見能力:70%

② 社会人基礎能力

- ・ 挨拶・応答態度:100%
- ・ コミュニケーション力:80%
- ・ リーダーシップ:70%
- ・ 報告・連絡・相談:60%

③ 学生自己評価アンケートの結果

メンバー全員が達成できた項目は、「スケジュールを立ててテーマを推進した」、「役割分担を決めプロジェクトに取り組んだ」、「他のメンバーとのコミュニケーションが上手にできた」、まあまあ達成できた項目は、「作業を明確に設定してプロジェクトを進めた」、「自分の意見を相手に伝えられた」、あまり十分にできなかった項目としては、「必要な情報を収集・分析・整理し、問題を解決した」、「新しい発想やアイデアを出すことができた」などとなっている。

3.2 次年度に向けた改善項目

次年度は、新しい学年を対象とするが、基本的には本年度の活動を踏襲して行う予定である。次年度のテーマは、①ロジスティクス(交通・物流)、②環境問題(3R)、③地域産業研究の中から学生の興味あるテーマを設定する。ただ、ゼミに所属したばかりで基礎的知識がほとんど無いので、テーマを決める前に、あらかじめ3つの分野に対してのレクチャーが必要となる。

チームでプロジェクト進めていく上で、各人の役割分担をすることは有効であるが、自分の分担以外の事項対しておろそかになり易いので、全体の流れを把握できるように指導することが必要となる。今年度も目標にしてきたことであるが、事実を正確に把握することの大変さと重要性を十分に認識させるよう指導することが不可欠である。

福祉施設で紙芝居

担当 今井久登

1. プロジェクト概要

様々の事業所の中で何を調べたいのかについてプロジェクトメンバーが話し合った。他のプロジェクトチームのテーマと重複しない領域は何かについて検討した。メンバーの話し合いの結果、豊橋市内の高齢者向けの福祉施設の現状を見てみようということになった。またただ見学するだけでは相手方にメリットがないだろうということで何ができるか考えた。メンバーの発案で本学図書館にある紙芝居を活用して高齢者の方々に見ていただくということになった。そこで図書館内の会議室で何度か紙芝居の練習を行った。訪問する福祉施設については豊橋市社会福祉協議会（あいつピア）にお願いして福祉施設を紹介していただいた。メンバーが電話で福祉施設と交渉し、了解を得られた施設を訪問した。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

どの時点においても参加メンバーの自発的な行動を主体とすることに留意した。たとえば教員はテーマについて他の案を考えていたが参加メンバーの意思に従ってテーマを決定した。アポについてもメンバーが電話で行った。こちら側の要望がうまく伝わらず、幾度か断られたこともあった。しかしあきらめずに取り組んだ。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

プロジェクトを実行していく中でそれ以前には予想できなかった様々の問題に気付かされた。どうすれば改善できるのか話し合い、実行した。各自が自力で発案し、改善したものもある。

ビジネス系学生のための情報処理資格に向けた 電子コンテンツの改善活動

担当 今井正文

1. プロジェクト概要

「ビジネス系学生のための情報処理資格に向けた電子コンテンツの改善活動」プロジェクトでは、ビジネス系学生のための情報処理資格である CompTIA Strata IT Fundamentals、(CompTIA Strata IT for Sales の)に向けた電子コンテンツの改善活動を行う。活動を通して情報系の学習方法を習得するとともにそれを支えるコンテンツ事業の実際を体験する。

具体的には、ILA によって配布される予定の電子コンテンツのテストおよび開発活動に参加した。電子コンテンツは、Web および ipad 用として H24 年度から公開される予定である。コンテンツのテストおよび報告、改善を繰り返しながら合わせて独自の小テストシステム開発も行った。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる事とし、毎週のミーティング時間の調整と中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術的な質問等があった場合や必要機材・試験環境については出来る限り対応した。また、プロジェクト進行上、コンテンツのライセンス保有者や本来のコンテンツ開発チームに対する連絡等、出来るだけ対外的に失礼が無いように配慮した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

プロジェクト進行等も含めて、学生に任せたため、最初は、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階で遅延等、色々あったようだが最終的にはチーム作業を出来ていた様子であったので学生の活動としては評価できている。また、独自の小テストシステムの開発にあたったチームでは、技術的な意味でも相応の学習効果もあったようである。プロジェクトとは直接関係ないが、メンタルタフネス講座のボードゲームに用に簡単な計算プログラムページ等も同様に学生同士で話し合っ作成していた点等も評価できるものであると考えている。

上記の点については、学生アンケートを見ると学生も同様の評価をしているようであるが、新しい発想やアイデアという項目では良い評価を得られていない。この項目については、私自身、気付かずに途中で意見収集の場を設定する等をしなかったという点で、担当教員として反省すべき点である。

対外的な評価については、成果物としての電子コンテンツについては、本来の開

発担当者からもテスト等学生活動に対して一定の評価を頂けている様子であった。一方、事後に学生の学外への連絡メール等をチェックする事にしたが、若干、問題のある記述等も見受けられた。また、対外的なスケジュール遅延等もあり、指導教員として今後の課題としたい。

プロジェクト専用アプリの使用に関しては、議事録とファイル管理については使いこなしていた様子であるが、タスク管理についてはあまり使いこなせて無い様子であるので、改善点としたい。

豊橋市内小中学校の太陽光発電システム稼働状況調査

担当 見目 喜重

1. プロジェクト概要

エネルギー・環境問題への対応、さらには脱原発へのエネルギー政策の転換から、再生可能エネルギーのさらなる導入が望まれている。その中でも太陽光発電は、住宅などエネルギーの需要地への導入が比較的容易であり、大きな期待が寄せられている。豊橋市でも、平成 21 年度末に豊橋市内全小中学校 74 校に太陽光発電システムを設置するなど、積極的に導入に取り組んでいる。

その一方で、太陽光発電は太陽電池モジュールの設置方法により発電量が大きく異なり、またシステムの故障など長期信頼性に関する問題点も指摘されている。そのために、発電に関するデータの長期収集・分析が必要である。

そうしたことから、本プロジェクトでは、太陽光発電システムの大量導入時代に問題となる長期信頼性の評価を行うために、豊橋市内小中学校の太陽光発電データおよび設置状況に関する情報収集を訪問調査により実施した。また、調査により得られた結果を分析し、生徒/児童のエネルギー・環境問題への意識を高める環境教育コンテンツの開発を目指した。

これまでに、17 小中学校について訪問調査を実施し、設置状況および稼働状況に関する情報を収集した。得られた情報から、一部の小中学校では発電量の低下を招く恐れのある設置状況にあること、太陽光発電システムの環境教育への活用については考慮すべき課題があることが分かった。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

プロジェクトを主体的に進めるためには、学生が問題意識を持つことが重要である。そこで、春学期は本プロジェクトのテーマの根幹となるエネルギー問題の現状と太陽光発電の役割に関する講義に多くの時間を割いた。また、実際に 3 中学校の太陽光発電システムを見学し、実物を見ることでプロジェクトへの取組意識を高めるように努めた。

秋学期は学生による訪問調査および収集した情報の分析を中心にプロジェクトを進めた。訪問調査の実施に当たっては、協力頂いた豊橋市教育委員会より各小中学校の担当教員宛に予め調査実施への協力を依頼頂くとともに、指導教員からも小中学校への依頼を行うなど実施環境の下地を整備した上で、実際に学生から各担当教員へ電話連絡を行うようにした。また、電話連絡を行う際のマニュアルの作成、調査事項記入シートの作成などを指導し、よりスムーズに調査が行えるように指導を行った。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

プロジェクト活動のメインとなる訪問調査を通して、学生の主体性は向上したように感じられる。最初は訪問先への電話連絡を敬遠していた学生も、経験を重ねるに連れてよりスムーズに、またより積極的に電話応対を行えるようになっていった。また、実際に一人で訪問して調査を行ったことにより、行動することへの自信のみならず、新しい知識を得たことによる充実感を持っていたように思われる。

その一方で、学生間の意見・情報交換、情報共有など協調性に関しては、多くの課題を残した。また、目標設定に関しても、学生間で差が生じた。この点について、ミーティングへの指導教員の関与の仕方に改善の余地があると思われる。

本プロジェクトの実施における最大の反省点は、訪問先との調整に時間を要したこと、また学生の講義日程と訪問先の予定との不整合生から、訪問調査は全体の 1/4 程度の小中学校にとどまり、プロジェクト開始前の目標を達成できなかったことである。この点を改善するために、次年度は訪問調査の開始時期を前倒しするなど、プロジェクトの計画立案を根本的に見直す予定である。

認定試験に受かるための学習環境構築と運営

担当 五味 悠一郎

1. プロジェクト概要

学内外を対象として、診療情報管理士認定試験の自主勉強会と対策講座の企画運営を行なった。また、OB/OG 訪問を行ない、就職活動に役立つ知識の修得や就職先などの開拓も行なった。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

他のプロジェクトに参加しているゼミ生がいたので、専門ゼミナールおよびプロジェクト演習の運営に支障がない様に、他のプロジェクトを運営している教員と実施時間などの調整を行った。

本プロジェクトでは、学生の就業力養成という大きな目標を達成するため、「主体性」「社会人スキル」「メンタルタフネス」「卒業生とのコネクション」を育む指導を行った。また、大学の存在意義の一つである「地域貢献」が行え、本学が抱える課題の一つである「知名度の向上」も可能な内容とした。具体的には、以下の通りである。

1) 主体性

プロジェクトのテーマを受講生自身に考えさせるようにした。時間的な制約上、一から考えさせることは困難であったので、教員側でテーマを五つ用意し、受講生に選ばせた。テーマは受講生のメリットにもなるものとし、モチベーションが高まるようにした。例えば、受講生が診療情報管理士認定試験に合格することを目標としていたため、合格率の向上にも繋がる「診療情報管理士認定試験対策講座」の実施を内容に取り入れた。

プロジェクト運営中は適宜必要なキーワードを与え、具体的な内容は受講生自身に考えさせるようにした。また、学内の教職員を受講生に紹介することで、受講生が学内で主体的に動ける環境を構築した。

2) 社会人スキル

アポイントの取り方や名刺交換の仕方などを、プロジェクト運営を通して自然と見につけられるような指導を行った。プロジェクトが PDCA に則って行われているか、適宜確認した。

3) メンタルタフネス

学生のメンタルタフネス育成には、成功体験と失敗後のリカバリー体験が有効であると考えている。教員が提示した課題は地道に行えば必ず成功するものとし、受講生が考えた課題は失敗する流れであってもしばらく様子を見て、大きな失敗になる前にフォローするようにした。

4) 卒業生とのコネクション作り

卒業後の進路に近い仕事をしている卒業生を訪問し、学生時代にやっておいた方がよいこと、現在の仕事の内容などの話を聞くことで、将来の目標設定ができるようにした。また、卒業生との繋がりをつくることで、就職しやすい環境を構築した。

5) 地域貢献

連携先団体にもメリットがある内容とした。例えば、「認定試験に受かるための学習環境構築と運営」を学外に公開することで、地域のニーズに応えられるようにした。

6) 知名度の向上

大学の知名度を向上させる内容を取り入れた。例えば、近隣の医療機関に「診療情報管理士認定試験対策講座」の案内を発送し、インターネットのWebサイトやブログで告知することで、診療情報管理士に興味がある人達に、本学を知ってもらえるようにした。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

受講生が2名と少なく、各受講生の負担も大きかったようであるが、プロジェクトの終盤では期待以上の働きをしてくれるようになった。受講生のプロジェクト自己評価アンケートを見ても、自分自身の成長を実感しているようである。初めての取り組みということもあり、学外との連絡で教員が仲介する場面も一部あったが、次年度以降は学外との連絡も受講生に全て任せたい。

プロジェクト活動成果発表会では、13プロジェクト中8位という結果になった。本プロジェクトは診療情報管理士認定試験の合格発表が行なわれる3月末まで実施されるため、プレゼン資料にあまり力を入れる余裕が無かったこと、発表会の評価基準が不明瞭であったため専門性の高い取り組みが評価されにくかったことなどが要因として考えられる。プロジェクト演習という授業の目的は、成果発表会の評価ではないことを受講生に正しく理解させ、社会人に必要なスキルを高める指導を今後も継続して行っていきたい。

「診療情報管理士認定試験対策講座」の学外参加者は20名程度と、知名度を向上させ、地域貢献することもできた。一般的に、大学の教育目的で実施するプロジェクトは連携団体の負担が大きく、WIN-WIN の関係をつくれないうことが多いが、本プロジェクトにおいては WIN-WIN の関係が構築できたと評価できる。関東地方や中国四国地方からも参加者を集めることができたのは、大きな収穫であった。良い取り組みだと判断できるので、次年度以降も継続していく予定である。

卒業生とのコネクション作りでは、もう少し多くの卒業生を訪問したかった。しかし、本学では卒業生訪問という行為がキャリアセンター経由でされたことがこれまで無かったため、卒業生訪問を行う流れを作るのに時間がかかり、一件しか訪問することが出来なかった。また、医療系に就職した卒業生が少なく、訪問先選定も困難であった。

持続型職業人 SOZO プロジェクト
成果報告書（教員）

次年度以降は、卒業生訪問の手続きが整備され、卒業生も増えるので、より多くの訪問が出来るはずである。

『会計事務所プロジェクト』

担当 中野 一豊

1. プロジェクト概要

『会計事務所プロジェクト』では、平成 23 年 7 月 18 日（月）に「小畑耕一公認会計士事務所」を訪問し、地方ならではの魅力あふれる事務所経営のあり方を示唆してもらった。小畑氏は、私の知り合いで奥さんが私の大学院修了生ということもあって懇切丁寧に対応していただいた。

その際に、金融機関や会計事務所への就職には、最低限簿記や会計の基礎知識が必要であることを認識した。そこで、以後、日本商工会議所主催の簿記検定試験 3 級の合格を目指して、傾向と対策を行い、受験者 2 名中 1 名の合格者を出した。残念ながら、1 名だけの合格者にとどまったが、引き続き集中的に過去問の解法を習得できるようゼミ生一丸となって、次回（2 月）への挑戦をする。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本プロジェクト活動は、学生の主体性に重きを置き、事前にいろいろな面で実践・質問事項の用意等を行ってきた。実践面では、弥生会計ソフトを用い、会計事務所で行っているような取引例の入力をはじめ、決算書のプリントアウトを行った。その際、側面から指導をした。また、会計事務所への訪問に際し、事前に質問事項を考えさせ、インタビューする時の心構え等について助言をした。

ついで、簿記検定試験対策は、集中的に過去問を徹底的に反復練習する指導をした。今後、2 月には、3 名の 3 級受験者と 1 名の 2 級受験者となる。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

会計事務所への訪問では、全員が的確な質問をし、1 時間ほどスタッフから誠意ある回答を得た。簿記検定試験対策では、受験者本人の心構えの弱さも感じている。2 名受験者のうち 1 名しか合格者（2 度目の挑戦で）が出なかったのは、本学の学生全般にも言えるが、受験勉強に対する集中心の欠如にあると思う。

プロジェクト実施に対する改善点として、この集中力を高める訓練を積むことだと感じている。就業力支援も、この方向で指導すれば、かなり学生自身に自覚が芽生えるのではなかろうか？

社会的企業の実証研究 サーラコーポレーションと東三河障がい者仕事センターが展開する 社会ビジネスの豊橋モデル

担当 中野 聡

1. プロジェクト概要

東三河地域における社会的企業から、サーラコーポレーションの社会貢献事業と東三河障がい者支援センターの活動を実証研究の対象に選定。その活動を追い、社会性、事業性、革新性を評価した。学生は、この過程を通して社会科学の実証研究の方法を学ぶ。

社会的企業は、例えば、「公共的利益の達成を目指し、企業家的戦略をもって組織される私的な活動であるが、利益の最大化ではなくある種の経済的・社会的目標の達成を主な目的とし、社会的排除や失業の問題にイノベーティブな解決をもたらす能力をもつ」と定義される(谷本, 2006 年)。その基本要件は、①社会性(今解決が求められている社会的課題に取り組むこと)、②事業性(社会的ミッションをビジネスの形に表し、継続的に事業活動を進めること)、③革新性(新しい社会的商品・サービスやその提供の仕組みの開発を通して社会的価値を実現し、社会経済システムを変革する可能性を示すこと)に求められる。

(1) サーラコーポレーションの社会貢献事業

サーラコーポレーションおよびガステックサービスの社会貢献事業から、廃油のバイオディーゼル燃料(Bio Diesel Fuel, BDF)への再生リサイクルの取り組みを取り上げ、その社会性と事業性、革新性を考察した。

①社会性 …… ある調査(2007-11 年)によれば、愛知県内 61 自治体のうち廃油の資源回収は 16 市町村にとどまる。地域の中核企業であるサーラコーポレーションが、豊橋市の行政に先行する形で、社会貢献事業の中核に位置づけている点は評価されるべきだろう。

②事業性 …… 担当者によれば、東三河と静岡地域で BDF100 の販売を開始、また、蒲郡市の車輻(観光バス)等にも利用されている。2011 年度 12 月からの事業年度での黒字化をめざしている。

③革新性 …… BDF リサイクルは、循環型社会への取り組みのひとつであり、余剰パンの飼料化、食品残さの堆肥化という 2 つの並行サイクルと共に機能している(複合性)。また、グループ各社と協力企業が、地域的なソーシャル・イノベーション・クラスター(SI クラスター)を構成している。SI クラスターは、「社会的企業や中間支援組織、大学・研究機関などが協力的かつ競争的な関係を構築することにより、多様な社会的課題への解決方法や社会的価値を生みだし、新たな社会的事業を形成するような組織の集積状態(谷本, 2006 年)を指す。

経済と環境の2者択一ではなく、その両立が民間ベースでも十分に可能であることを示している。

(3) 東三河障がい者仕事センター(WACNET)の活動

東三河障がい者仕事センターは、アメリカ、ニューヨークの「NY ファウンテンハウス」に由来するクラブハウスモデルを取り入れた、発達・精神障害者の自立・就業支援を行っている。障がい者支援として、進路・就労相談、就労に向けての訓練指導、準備支援、職場定着支援、就労の場の開発、モデルビジネスの開発訓練、企業面接の助言、就労困難となった場合の再訓練、進路相談、ジョブコーチの派遣、愛知県就労支援者の派遣等の多彩なメニューを有する。

また、日常生活・地域生活支援として、働く障がい者の生活相談、生活習慣の形成、健康管理、金銭管理、住居の確保、余暇活動、生活設計等を行う。その他にも、関係機関との協議事業や研修人材育成事業等の啓発活動、企業実習中の指導や連絡調整、継続的訪問による適応状況の把握、雇用管理に関する助言等の企業支援活動が仕事センターの機能を支えている。

① **社会性** … 発達・精神障害に苦しむ人々は、社会から排除された形で引き籠もりがちになる。そうした人々の自立と就職支援、多様なビジネスモデルによって支えてきた点に、この NPO 法人の社会性が存する。

② **事業性** … 事業性に関する詳細な情報は入手していないが、豊橋市に地域活動支援センターに認定された。また、発達・精神障害者の自立を支援するための多様な採算型事業を展開している。

③ **革新性** … コミュニケーションによる問題解決のために、クラブハウスモデルを軸にした発達・精神障害者支援を展開している。そこでは、・誰でも来ることができる、・いつでも帰ってくることができる、誰からも必要とされる人間関係を築くことができる、誰からも必要とされる役割がある、をモットーに、自活が困難な障がい者の働く意志を尊重し、加藤理事長が「豊橋モデル」と呼ぶ、多様な自立支援プログラムを開発、提供してきたところに、この NPO 法人の革新性がみられるのではないかな。

経済は、全ての人間が社会で幸福に生活するために存在する。社会的排除(social exclusion)を社会的統合(social inclusion)に転換することが必要であるにもかかわらず、それはまだ、わが国の社会・福祉政策の基本目的とみなされていない。福祉国家と家族、NPO のネットワークが有効に機能すれば、こうした原則も、社会的に共有されうるだろう。

なお、活動詳細は、同名の報告書を参照(企業と NPO の担当者にフィードバックしたものを、サーラコーポレーションの提供資料と共に図書館に所蔵)。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

このゼミでは、学生が社会科学的な実証研究を経験することをプロジェクトの目的に掲げた。したがって、枠組みは教員が設定し、その中で、学生がリサーチ対象や個別テーマを選択していくアプローチを取った。この方法にはメリットとデメリットがあるが、上記目的に鑑みて、来年度も踏襲すべきだと思う。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

積極的に関与しようとする学生への対応の結果でもあるのだが、進行過程における教員の関与がやや過多だった印象を受ける。来年度は、学生中心の運営へシフトしたい。

豊橋筆プロジェクト

担当 花岡 幹明

1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、豊橋の伝統工芸である豊橋筆の幅広い普及と地域の活性化に向けた展開として、学生によるアイデアの創出と商品企画を実践することを目的としてきた。

主たる活動は、(有)筆匠榊原の北村氏の指導のもと、筆商品作りを学び、新商品の企画販売に至る全ての工程を学生のみの方で実践していくこと、並びに豊橋筆の普及・PR 活動として豊橋三大学チャレンジショップや本学チャレンジショップの活動を通じて、同世代の学生たちと協働し、企画を実践していくことであった。また、これらの当初より計画した活動に加え、ミニ筆ストラップの商品化に纏わるビジネスプランを作成し、東三河ビジネスプランコンテストの一般アイデア部分にエントリーし、最終報告会での発表に到った。

メンバー学生（ゼミ3年生）は5名で、商品企画と PR 活動（チャレンジショップ）に分かれ、作業を分担した。更に、全体の統括とサポートを担当するリーダーを1名置いた。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

学生に対する直接的な指導に関して触れる前に、今回のプロジェクト全般において協力して頂いた(有)筆匠榊原の北村氏との関係について記しておきたい。北村氏とは、プロジェクト開始の約1年前より、数回の打合せを行ってきた。当初は本プロジェクトを想定したものではなかったが、学生の状況や協力者の要望など、お互いに認識すべき点を明確に理解し合っていたことは、プロジェクトを進める上で非常に重要であった。学生が自律的に行動を展開することを想定すると、協力者にかかる負担は大きなものとなる。事前にこれらの可能性なども検討し、役割や対応を了承して頂けたことは、プロジェクトの運営において大変効果的であった。

学生指導に関しては、先ず、組織として活動できるように、個々の学生にそれぞれの希望や適性にあった役割を明確に与えた。これにより、活動は重複しても、それぞれに役割は異なるため、責任感がモチベーションにつながり、個々が機能するようになった。また、リーダーを決め、互いにサポートしあうことを意識付け、作業の進捗やロードバランスにより、学生間で調整することを指示した。

対外的な活動（相談・交渉）に関しては、前半は明確な指示を与えた。その際に、相手先に本プロジェクトとして、どのような貢献が出来るかを考えさせるようにした。学生という立場を利用すれば、大方、こちらの希望に無償で応えて下さることが多い。しかし、それでは就業力というテーマにおいてあまりにも無責任なものになってしまう。ま

た、プロジェクトの趣旨を再認識させる点でも、重要なことであった。経験の少ない学生では、現場で緊張しまうケースは多いだろうと予想された。そんな場合、細かいシミュレーションを行うよりも、こちらの依頼内容とそれによりどんな貢献が成せるかというストーリーを持っておくことは、自らの立場を明確にさせる有効なトレーニングであった。

前半の数回の打合せや相談には、経験の少ない学生が多いため、学生に同行し、会話を記録させ、事後に会話の意味や交渉・議論の展開、相手の意図などを解説した。このトレーニングを数回実施することにより、以降は、事前にミッションを確認する程度で、事後報告を電話、ないし直接行わせた。打合せの様子や内容など、直接口頭で報告を受けることで、問題点をある程度明確に指摘することが可能であった。また、担当学生も不安な要素をすぐに解消できる点は、重要なことであったように思われる。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

チャレンジショップでのイベント実施や筆販売、ミニ筆ストラップ新商品の企画・製造・販売の実施などの成果からすれば、メンバーそれぞれの活動に対して一定の評価を与えることが出来る。また東三河ビジネスプランコンテスト一般アイデア部門における最終審査会発表といった当初の目標イメージを超えた成果も、学外協力者との連携によるところが大きく、メンバー学生の対外的活動の成果として評価できる点である。

本プロジェクトの実施にあたり、問題点の多くは、時間的制約に関するものであった。特に、学外協力者との打合せに対する時間調整に関しては、本プロジェクトだけの問題ではなく、訪問時間と授業時間が重なることも多かったように認識している。また、学生自身も反省点として挙げていたように、期日を限定しても、実際に間に合わないことが多く、メンバー間での時間調整にも苦労していた。これは担当者のスキルや能力、メンバー数の問題などに起因することも考えられるが、学生からの申告では、授業やアルバイトによる時間的制約を挙げるが多かったように思われる。

このような問題を本質的に改善することは、現状、困難であるが、一部の活動を夏休みなどの時期に集中的に行ってしまう方法は可能であったかと思われる。実態として、本プロジェクトにおいても、チャレンジショップ、商品化、ビジコンと期間を区切った形で活動を行ってきた。但し、それでも2～3ヶ月は長く感じることもあり、より短い期間で集中的に成果を上げるような形態も、チームとしての凝集性を高める点から、一考の余地があるものと思われる。

豊橋トップインタビュープロジェクト

担当 三好哲也

1. プロジェクト概要

「豊橋トップインタビュープロジェクト」では、三河地区で著名な企業に、学生が訪問し、企業経営の視座やビジョンを聞き取り調査し、WEBページで公開することを活動目的としている。聞き取り調査では、豊橋市もしくは三河地区を活性化するため方策やアイデアについても意見も併せて伺い、シティプロモーションの一助となる活動とすることにもなっている。

平成 23 年度には、株式会社平松食品、エフエム豊橋株式会社、サイエンスクリエイティブ株式会社、ヤマサちくわ株式会社、本多電子株式会社の 5 社を訪問し、インタビューを行った。特に後半の 3 社については、訪問依頼状の作成から訪問予約、インタビューの活動などの準備から実行まで全てを学生が主体的に運営した。12 月 23 日の発表後、5 社の調査成果を WEB ページへのまとめ作業を行っており、近日、公開予定である。公開に当たっては、インタビューをさせていただいた皆様にご高閲をいただき、下記アドレスで公開中である。

※公開ページ <http://projectweb.sozo.ac.jp/miyoproj/>

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

プロジェクト活動は、学生の主体性や協調性を醸成するための活動として実施されることを考慮し、本プロジェクト活動においてもできる限り、学生が主体的に活動するように指導を行った。本プロジェクトでは、インタビュー活動を行うための一連の活動を、インタビュー対象を変更しながら行う活動であり、主体となる学生にとっても、同様の活動を繰り返し実施する活動となっている。そのため、インタビューに係る一連の活動を一度行い、それをもとに改変していくことで新しい課題に取り組めるようになっていく。

本プロジェクトは、対外的な活動でもあり、インタビューをさせていただく企業に対して、失礼やご迷惑がないように配慮が必要である。活動開始時点ではそのことを重視して、インタビュー予約なども、学内の人的ネットワークを活用して、指導者レベルで設定したが、後半では、前半で学んだ訪問予約方法に準じて学生自ら対応させるように留意して指導した。また、学生のみで訪問するに当たっては、事前に指導者から訪問先にメールもしくは電話にてご了承を得るとともに不測の場合の連絡先を連絡し、対応を依頼した。指導者が同伴しなかったケースでは、学生の訪問前後に訪問企業の担当職員とインタビュー対象の方へのご挨拶とお礼を電話で行うことにした。

インタビュー内容を WEB により公開するにあたって、公表場所の検討を行ったところ、ユビキタスグループ担当の山口講師によって、Word Press による公表環境を調整い

ただいた。学内サーバでの公表であり、校正も容易であり、インタビュー先からの対応が迅速に行える状況であることも併せて報告する。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトについての評価

プロジェクト活動では、学生の主体性や協調性ならびにコミュニケーション力養成が目的である。本活動には、インタビュー先の決定、訪問先への依頼メールの送付、電話による確認、訪問してのインタビュー実行が学生の課題であったが、これらの活動には育成項目である主体的活動、協調活動、社会人と交渉を通してのコミュニケー

表 1 プロジェクトメンバ 自己評価結果

	質問内容	そう思 う	ややそ う思う	あまり そう思 わない	そう思 わない
Q1	プロジェクトで行う作業を明確に決めて、プロジェクトを進めることができましたか？	2	1		
Q2	プロジェクトを進める上で、スケジュールを作成して取り組みましたか？	2	1		
Q3	プロジェクトメンバー間で役割を決めて、プロジェクトに取り組みましたか？	3	0		
Q4	他のメンバーとの情報交換を円滑に進めて、プロジェクトに取り組みましたか？	3	0		
Q5	自らの意見を主張することができましたか？	2	0	1	
Q6	自らの意見を口頭でわかりやすく伝えることができましたか？		1	2	
Q7	プロジェクトの問題を認識し、必要な情報を収集・分析・整理し、問題を解決することができましたか？	2	1		
Q8	既存の枠にとらわれず、新しいアイデアを出すことができましたか？		1	2	
Q9	相手（他のメンバー、連携企業・団体の方）の意見を丁寧に聞き、話を引き出すことができましたか？	2	1		

ション力向上のための活動が含まれており、一定の成果を得たと評価できる。特に、後半の企業訪問は、学生自身の計画立案と実行であったので、学生の社会人力養成にプロジェクトが寄与できたと評価できる。

学生の自己評価を表 1 にまとめる。10 個の設問において、ほとんどが肯定的な自己評価がなされている。ただし、コミュニケーションの項目において、やや丁寧な自己評価になっている。本プロジェクトでは、企業のトップへのインタビューを行うために、十分なコミュニケーションをとるためには、インタビュー対象の専門とされる領域についての知識も必要であり、事前準備においては、企業概要の調査や教員を含めた意見交換をすることで、知識充実を図った。インタビューの中で話の流れの中で適切な質問や会話ができたかという視点で自己評価した結果として、少し厳しい評価をしていると思われる。教員がインタビューに同行した場合の状況やインタビュー対象者への聞き

取りから評価すると、準備したインタビュー内容については問題なく質問できていたと評価できる。相手方への好印象を形成するためには、積極的な態度が必要であることを、事後のミーティングで指導を行った。

3.2 次年度に向けた改善項目

次年度は、新しい学年の学生であり、基本的には本年度の活動を踏襲して行う予定である。学生の中で興味ある企業の調査方法などの整理を行うとともに、企業研究などを併用した取り組み方法の検討が必要である。経験の浅い学生が直接相手方と連絡をとることによる相手方への御迷惑を考慮すると学生の主体性養成と外部企業への失礼のない対応とは、相反する場合も考えられる。そのバランスをどの程度にするかについては、今後も検討が必要である。

学食広報プロジェクト by 学食おうえん団

担当 三輪 多恵子

1. プロジェクト概要

本プロジェクトでは“情報発信のための一連の活動”を体験することで、情報源と受信者それぞれを意識したコンテンツ制作についての理解を深めるとともに、webサイトや紙面等を用いて情報発信するための様々な知識・技術を修得することを目的とした。

連携先として、大学内にある2箇所の学食（キッチンSOZO, カフェテリア; 日本ゼネラルフーズ株式会社）にご協力を頂いた。学食を選択した理由は、

- (1) 学生にとって身近であり、受信者の視点である「何が知りたいか」「どんな情報があったら便利か」等を想定しやすい。
- (2) 今回のプロジェクトにおける広報活動では、学内全体（学生、教職員）が情報の受信者であり、その反応を確認しやすい。

等が挙げられる。また二次的なものとして、印刷物の掲示場所について外部より自由度が高い、インタビュー等における移動時間の制約が少ない、等がある。

1.1 プロジェクトの具体的な内容

本プロジェクトの具体的な活動内容を以下に示す。

- (1) 学食webサイト(<http://sozocafe.web.fc2.com/>)の作成
 - ① サイト上に「今週のメニュー」や「インタビュー」等のページを設け、情報を発信する。
 - ② アクセス数を記録、分析し、様々な広報活動との相関をとることで、実際のサイト運用についての知識や経験を得る。
 - ③ サイト内にアンケートシステムを実装することで、デザインを見せるだけではないwebサイトの役割について知識と経験を得る。
- (2) 掲示物、卓上チラシを定期的に発行
 - ① webと印刷物を関連付けることで、相互作用としての反応を得る。
 - ② 各媒体の優位性について検討する。
- (3) 学食従業員のの方々へ毎月のメニュー提供のお願い。インタビュー。
 - ① 情報収集の基本となる「聞きたい情報を整理し、相手から情報を引き出す」という作業を体験する。
 - ② 外部（一般社会）との交流を通して、アポイントメントの重要性、正しい言葉づかい、等について自覚を促す。
- (4) webデザイン会社や広告・印刷系の会社に就職したOBと交流
 - ① 実際の広告、デザイン系の職種について理解を深める。

- ② OBとの直接的な交流・対話を経験する。
- (5) 学食への報告(2月 予定)
 - ① アンケートの集計結果やアクセス解析結果等をまとめ、学食へ報告する。
- (6) その他(予定)
 - ① 来年度の新入生向けに「学食案内(仮)」を作成し、ガイダンス時に配布できるよう手配する。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本チームは学生 8 名と人数が多く(内 1 名は別のゼミナール)、また、編入生が 2 名含まれていた関係で時間割の調整がつかず、全員が顔を合わせられる時間がプロジェクト演習の授業時間のみに限られた。このため、報告と連絡、情報共有、作業分担、全体のスケジュール計画とその遂行、を主なポイントとしてプロジェクトの指導を行った。

2.1 iPad とプロジェクト管理アプリの利用

本プロジェクトでは、作成した web サイト上のメニューページの更新(毎週)、掲示物の作成(毎月)、等を並行して行っており、それに付随する諸作業については全員が情報共有する必要があった。このため、毎回の授業内で、各学生に対して“一週間分の進捗報告”と“次週の作業計画の報告”を課し、資料やデータについては必ず電子化した上で、プロジェクト管理アプリを通してデータ共有するように指導した。プロジェクト前半では“作業計画の連絡”についての認識が甘く、報告の際に「やる予定でしたが、できませんでした」と言う学生もいたが、

- (1) “作業計画”を記録し、次週の授業で“記録”を見ながら“進捗”を報告させる。
- (2) 誰かの計画に基づいて他のメンバの作業予定が組まれる可能性について、繰り返し指導する。また、そのような状況をあえて発生させる。

等を行うことで、徐々に改善されるようになった。他のメンバの作業状況を意識するようになってからは「他の人が忙しそうなので、この仕事は自分が担当します」と自発的に申し出る学生もあり、一定の効果があったと考えている。なお、1 月 10 日時点において管理アプリにアップロードしたファイルは 44、議事録は 21、タスクは 67 であり、学生が積極的にアプリを利用してプロジェクトを進めていたことが伺える。

2.2 作業分担とスケジュールの遂行

人数が多かったこともあり、明確にチームリーダーを決めず、プロジェクトの統括は教員が行った。プロジェクト中盤で欠席が続く学生や、分担した作業を忘れる学生もあり、個別に注意しなければいけない場面も多く発生したため、特定の学生に精神的な負荷がかかり過ぎることを考えると、教員主動で問題なかったと感じている。一方で、web サイト、掲示物、インタビュー等、個別の作業については“作業内容・手順を掌握してマニュアルや資料を作成する”、“何か変更があった際に管理アプリを通して全体

に連絡する”等のリーダー的な役割を自発的に担当する学生がおり、プロジェクト全体としては学生の自主性に任せる形で運営を行った。

web サイトやイメージキャラクタデザイン等、専門的なスキルが必要となる場面では、一部の学生に多くの負担を掛けることとなったが、それ以外の

- (1) web サイト上のメニューページの更新（毎週）
- (2) 掲示物のネタ・話題を考えて作成し、所定の手続きを行って掲示（毎月）
- (3) 学食にアポイントメントをとり、メニュー表の提供をお願いする（毎月）
- (4) 学生課に土曜営業日の情報提供を依頼する（毎月）

については、全員持ち回りで作業を行った。各分担については、学期の初めにスケジュール（分担）表を作成し、管理アプリでいつでも確認できるようにすると共に、前述の“進捗・作業計画の報告”の際に全員で確認することで、作業漏れ等が起こらないように留意した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

学生の自己評価アンケートの結果を表1に示す。

表1の結果から、全体的な傾向として、自分の意見を伝える、問題認識し解決する、アイデアを出す、等の項目について学生の自己評価が低いことがわかる。前述のように、本プロジェクトについては全体の統括を教員が行っており、このため、発言や提案等が教員主導で行われることが多く、「自発的に」という観点から低い評価になったと思われる。また、前述のように、全員が顔を合わせて話をする機会がプロジェクト演習の授業時間しかなく、パソコン演習室を使用していた関係で、対面でのミーティングのような形式が困難だった。このため、発言や議論がしにくく、積極的な発案に至らなかったのではないかと考えられる。

表1. プロジェクト自己評価アンケート（三輪プロジェクト：8名）

質問事項	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	思わない
Q1 プロジェクトで行う作業を明確に決めてプロジェクトを進めることができましたか？	4	2	2	0
Q2 プロジェクトを進める上で、スケジュールを作成して取り組みましたか？	2	5	0	1
Q3 プロジェクトメンバー間で役割を決めてプロジェクトに取り組みましたか？	4	3	1	0
Q4 他のメンバーとの情報交換を円滑に進めてプロジェクトに取り組みましたか？	1	4	1	2
Q5 自らの意見を主張することができましたか？	1	3	3	1
Q6 自分の意見を口頭で分かりやすく伝えることができましたか？	0	2	4	2
Q7 プロジェクトの問題を認識し、必要な情報を収集・分析・整理し、問題を解決することができましたか？	0	3	4	1

Q8 既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出すことができましたか？	0	2	4	2
Q9 相手（他のメンバ、連携企業・団体の方）の意見を丁寧に聞き、話を引き出すことができましたか？	2	4	2	0
Q10 ビジョンを描き、目標を設定することができましたか？	1	5	1	1

これらの点を考慮し、教員主動と学生主動の場面を切り分け、議論等は学生に任せる形で運営することを検討している。また、議論しやすい環境作りが必要であり、対面でグループディスカッションが可能な教室を確保した上で、プロジェクトに臨む必要があると考えている。

なお、別の問題として、プロジェクト演習の作業時間を確保するために、ゼミナール1, 2の時間を削ることが多く、ゼミナールの進捗に影響が出ているのは事実である。無理の無い計画を立て、学習環境を確保することで、ゼミナールとプロジェクトを両立する必要があると強く感じている。

本プロジェクトの内容は、広報や宣伝、企画、デザインといった職種に関連するものであり、これらの分野に興味を持っている学生にとっては、非常に有意義な経験になったと考えている。また、情報の収集から加工（コンテンツ制作）、具体的な情報発信、さらに、活動の評価、改善案の検討に至るまでの各工程では、学生自身が主体的かつ具体的に行動できる様々な場面を設けることができ、学生の成長に繋がったと感じている。

就業力育成プロジェクト報告書

担当 森田和正

1. プロジェクトのテーマ

中部地域における繊維産業

2. プロジェクト概要

新規学卒者の就職内定率を向上するため、学生のエンプロイアビリティを育成することを目的とする。そのため学部3年生担当学生に対し、以下を目的とした授業を行う。

- ① 就職状況の把握と就業意識の向上を図る。
- ② 企業が学生に期待することの認識。
- ③ 就職試験に臨む際の学生の心構え。
- ④ 希望産業の把握の仕方。
- ⑤ 実態の体験、把握。
- ⑥ 就職戦線に臨む際の注意。

3. プロジェクト実施上の指導方法・留意点

以下を意識して実施した。

- ① ゼミ学生が時間や約束を守ることに注意した。挨拶。
- ② 学生の常識と企業の常識が異なることを教えた。
- ③ 言葉だけでなく、行動で示す習慣をつけることを特に示した。
- ④ 企業訪問時はプロと接することを意識させ、学びとるように指導した。

4. プロジェクト実施に対する評価・改善点

企業者に対する接し方（挨拶、電話、メール）の向上に関しては、少しは感じる場所があったことを期待したいが、自分で理解し行動するという点では、残念ながら効果は薄かった。

本目的に沿った真剣な対応が望まれよう。

炎の祭典支援プロジェクト

担当 山口 満

1. プロジェクト概要

1.1 プロジェクトの目的

本プロジェクトは、豊橋市を代表する祭りである『炎の祭典』昼の部イベントについて、動画素材を通じて広報することにより支援し、地域振興に貢献することを目的とする。具体的には、炎の祭典委員会および炎の祭典当日の取材（昼イベント制作過程と結果の取材）、広報用動画の作成（委員会動画、本番当日の動画）、および、その動画を Web サイト上で公開する活動を行った。

プロジェクトメンバーは山口ゼミ所属の3年生2名であり、学外の方と接触する上記の実践を通じて座学では得難い様々な知識と経験を獲得させ、コミュニケーション能力やタスク管理能力を養うことも目的とした。なお、本プロジェクトは、豊橋商工会議所青年部（YEG）のメンバーで運営される『炎の祭典』実行委員会のご協力を得て実施された。

1.2 活動概要

『炎の祭典』のメインイベントは、祭りの名のとおり、夜の部の花火演目『炎の舞』である。一方、手筒花火以外の豊橋の魅力を伝えている貴重な昼イベント（昼の部）は、夜イベントに比べて認知度が低く、より一層地域内外にアピールしていく必要があることを YEG の一員でもある村松東プロジェクト担当講師より伺った。

これを受けて、『炎の祭典』昼イベントを盛り上げるための『炎の祭典支援プロジェクト』を立ち上げ、大きく分けて以下の三つの活動を通じて広報活動を行うこととした。

- (1) 炎の祭典委員会および炎の祭典当日（昼の部）の取材（ビデオ撮影）
- (2) 広報用動画の作成（取材ビデオの編集）
- (3) 動画公開用の Web サイトの作成と運用

(1) 炎の祭典委員会および炎の祭典当日の取材（ビデオ撮影）

豊橋商工会議所青年部の関係者に対し、学生・教員からプロジェクトの主旨説明を行い、取材許可を頂くことができた。その後、およそ月に一度、豊橋商工会議所で行われる炎の祭典委員会の会議の様子について、ビデオカメラ・デジタルカメラ・ICレコーダーを用いて取材した。なお、委員会のほかに、実行委員長にインタビューする形式での撮影も行った。取材回数は全11回で、撮影画像は610枚、撮影動画は75ファイル、総ファイルサイズは約135GBで総撮影時間は約19時間となった。

炎の祭典当日については、2台のビデオカメラ・1台のデジタルカメラを用いてメインステージ撮影担当と周辺イベント撮影担当に分かれて取材を行った。なお、炎の祭

典当日時点で、プロジェクト活動メンバーが1名となる事態となり、教員が全面的に協力することにより取材を実施した。

（2）広報用動画の作成（取材ビデオの編集）

（1）の取材で得た動画を広報用動画として加工するため、本学サポートセンターのPCにて動画編集ソフト「Corel Video Studio Pro X4」を用いて編集作業を行った。なお、作業は学内の編集環境が整った7月から開始した。

「委員会ビデオ」編集作業の途中段階で、取材データ量が膨大であることから、炎の祭典本番の日までに完成させるためには時間が不足していることが明らかとなった。このため、委員会の取材動画の編集作業を一時中断し、炎の祭典当日の取材および動画編集をし終えた後で再開することに計画を変更して対応した。

（3）Web ページの作成と運用

動画編集作業と並行して、広報用 Web サイト作成を行った。作成した動画の掲示先としては、既存の Web サービス（YouTube など）は利用せず、専用の Web サイトを構築することとした。

当初計画では、Web サイト構築のすべてを学生に実施させる予定であったが、活動員の減少により、実現が困難となった。プロジェクトの核は取材とその結果の編集であったため、Web サーバセットアップおよびサイトの基本部分の構築は教員が行い補助した。

本プロジェクトの成果（編集動画等を掲示した Web サイト）は、下記 URL にて WWW 上に公開中である（URL： <http://projectweb.sozo.ac.jp/myamaproj/>）。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

2.1 指導方法

プロジェクト実施に係る「タスク管理（登録）」「議事録作成」は、学生にとっても初めての経験となるため、プロジェクト活動の前期については教員主導により「作成例」を見せる形で指導した。

週に一度のプロジェクト演習の時間では、主に現在の進捗状況・今後の予定の確認、実施に関する案出しなど、話し合いのために時間の大部分を割いた（活動本番は学外＝豊橋商工会議所での時間外活動と位置づけた）。

活動の進捗状況管理、議事録管理およびファイル共有等には、貸与された携帯情報端末（iPad）にてプロジェクト管理システムを積極的に利用するように指導して行った。発表資料の受け渡しや添削などについても、プロジェクト管理システムを通じて共有化することを意識した。また、他プロジェクトの Web サイトへのリンクを登録して閲覧し

やすくすることによって、他の活動の進捗を多少なりとも意識させるよう工夫した。最終的には、議事録:16件、タスク:21件、チャット:52件、登録ファイル:27となり、2名による8ヶ月程度のプロジェクトとしては、およそ適当な活動量(活発さ)であったように感じる。対面でのコミュニケーションが多かったため、チャットの利用頻度は低かった。

2.2 留意点

学生にとっても初めての経験であるため、特にコミュニケーション(プロジェクトの内容に限らず)を重視して、学生の様子を観察しながら指導を行った。

活動開始当初は、設備(ビデオ編集用機材、Web サイト構築環境)の準備が完了しておらず、具体的な活動計画を立てることが困難な状況であった。このため、学生は見通しが立たない状況に不安を感じていたようであった。これに対し、おおよその予定を伝えたくて、環境整備後にスムーズに取り掛かれるよう事前に教育しう点については指導を行い、不安を取り除くよう配慮した。

活動中期より、活動メンバーが1名になる事態となり、該当の学生の明らかなモチベーション低下が認められた。これについては、教員が一活動員としてプロジェクトに参加し作業分担することによって、学生に過大な負担がかからないよう留意した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 評価

当初は学外の方との接触に戸惑い気味であった学生も、商工会議所青年部のメンバー(経営者多数)との会話を重ねるうちに、目上の方との話し方・接し方を自然に身につけたようである。また、大学の名前を背負って活動していることを自覚し、無責任な行動・対応(自分の仕事を投げ出す)にならないよう努力していたようであった。

学生のアンケート回答結果によると、「Q5 自らの意見を主張することができましたか?」の問いに「そう思う」と回答しており、本活動を通じて成長した様子が伺える。

動画を掲示したWebサイトを8月末から公開したが、これについて炎の祭典オフィシャルTwitterやオフィシャルブログで取り上げていただいた。これについては、学生のモチベーションが高まり、非常に良い効果を生み出したようである。取り上げていただいた豊橋商工会議所関係者の方々には、あらためて感謝申し上げたい。

本活動については、関係の方々から多数のお褒めの言葉をいただき、学生に「成功」体験を与えることが出来たと考えている。関係者の方々から次年度以降も活動を継続して欲しいという声もいただいているため、今回の経験と反省を踏まえ、積極的に検討していきたい。

3.2 改善点

活動を開始した最初の時点では、教員・学生から多数の案が出され、それらすべて

を計画の中に盛り込んでしまった。実際に活動を行ったところ、時間的な制約から実現できないことがいくつか生じた。これについては、教員の積極的な介入（手助け）により、期日までに仕上げた。今回の活動を通じて、現実的に遂行可能な無理の無い計画を立てるべきであったと反省している（紆余曲折の時間があり、学生を混乱させる結果となってしまった）。特に、今回問題となったビデオ編集環境の準備や Web サイト構築用サーバの準備遅れなど、教員側の対応遅れがないよう改善していきたい。

活動メンバーが 2 名であったため、プロジェクトとして実施可能な不安な部分もあったが、結果的に成果を残すことができた。しかしながら、学生間での意見交換やタスク分割という観点では少人数プロジェクトは好ましくないと考えており、次年度以降については、実施前にプロジェクトのあり方について関係者間で協議が必要なのではないかと考える。今回については、1 名が途中で参加できなくなったことから、残りの 1 名に負担がかかることとなった。外部の方々と連携していること（責任）もあり、学生にとっては相当の重圧であったようである。今回のケースは、元々の学生の気質（性格）により難を逃れた感があるものの、学生によってはプロジェクトを存続させることが出来ない事態となっていたことは容易に予想できる。この問題については、今後関係者間で議論していきたい。

全体を振り返り、教員が協力し過ぎた部分もあったため、今後は学生が主体的に活動できるよう留意して指導していきたい。

東三河 Bible

担当 吉川 優

1. プロジェクト概要

東三河のグルメ、温泉、観光、祭りについて個々に調べ、4つの資料を合わせてひとつのホームページを作成する。

プロジェクトを履行するにあたり、常にお互いを意識して行動することを大切にし、作業に必要な計画、メンバー間のコミュニケーションを重視しながら、コミュニケーション力の向上を行った。

調査結果はWEB ページにまとめ、地元紹介ページとして公開予定である。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

プロジェクト活動は、学生の主体性や協調性を醸成するための活動として実施されることを考慮し、チームリーダーを中心に、参加メンバーの自発的な行動を主体とすることに留意した。

テーマ選びは、教員とプロジェクト参加メンバーで決定したが、調査項目、調査内容等は参加メンバーが意見調整を行い、なるべく参加メンバーの目線で企画から制作まですべて行うように指導した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

プロジェクトを実行していく中で諸事情により全体の作業に遅れが出たことで、計画していた蒲郡クラフトフェアへの出展に間に合わず活動予定が大幅に変更となった。

プロジェクト活動は、チームリーダーを中心に、参加メンバーの自発的な行動を主体とする作業であるが、チームリーダーが秋学期から欠席続きで全体の作業に大きな遅れが出た。

現在は新しいリーダーのもとで、ひとつの形として落ち着き、一丸となって作業を進めている。

食の伝達

「大学生コックさんのクッキング(子どもクッキング)教室」プロジェクト

担当 朝倉 由美子

1. プロジェクト概要

調理師コースおよび朝倉セミナーでは平成 18～20 年度の 3 年間、現代 GP「食農教育」において園児や小学生、または親子を対象に大学内もしくは開催する小学校の調理室で料理教室を実施してきた。その活動の中から「子どもたちは料理をする時はいきいきとしており、自分で調理したものは苦手な食材でも食べられた」という好結果を得た。平成 21 年度からは豊橋市の子ども未来館「ココニコ」の体験プログラムの講座に入れていただき、会場をココニコのキッチン工房に移し、小学生を対象に料理教室を継続している。本年度は年間で 4 回の実施を計画した。

調理師は自らの技術向上のために学ぶことは当然であるが、自ら作ることより他者に指導することの方が難しい。そこで、習得した技術を外部に発信することで自身の技術や知識等の問題点の確認ができる。子どもたちにおいしいものを作る楽しさや調理に参加する協調性を伝える活動の中から、クッキング教室の開催に伴うさまざまな過程を経験する。メニューの決定、試作、材料発注、配布レシピの作成、タイムテーブル作りや危険の予想に対する準備、そして当日の進行など分担を決めて話し合いながら進めていく。

昨今の食事には野菜の摂取が不足している点が指摘されている。東三河は旧来農業地域で、現在も主要産地ではあるが、一方では現代の食事情同様に野菜嫌い、野菜不足の傾向があるようだ。そこで、「野菜を多く食べられて、かつ美味しい献立の発信」を中心テーマに、郷土料理や豊橋で生産量の高い農産物を使う献立を取り上げる。

参加者(小学生)とのふれあいの中で、怪我をさせない事に細心の注意を払い、様々な想定外の場面にも遭遇しながら、臨機応変に対応できる、とっさの判断力や実行力を身に付けることを目的とする。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

ー1指導方法

テーマやポイントを提示して、その後は学生が話し合いながら進めるようにした。

＊郷土料理も取り入れ、季節を考慮して 4 回分の献立を話し合い決めた。

＊各回の試作は全員で行い、手順や分量の確認をした。

・調理技量の差は試作の中で修正させるようにしたが、修正不足は各自での自主練習も課した。

＊持ち帰りレシピ作成、タイムテーブルの検討、材料の発注票作成、当日の進行シナリオ(担当者)、アンケート作成と集計等一連の活動は 2 グループに分けて、4 回を交互に 2 回ずつ担当するようにした。

＊多くを経験するために、2 回担当のうち、同じ分野を担当しない。

それぞれの文書は情報処理の授業で学んだ技術を活用して作成し、メールやフォルダーの活用により修正点等の指導のやり取りを行った。

＊担当しない学生は担当グループから提示されたタイムテーブルとレシピにより手順と内容の確認をする。そして、当日各班に分かれて指導に当たった。

＊活動の反省と今後に活かすために、参加者には実施後アンケートを取った。

＊学生は実施後の感想文を提出し、参加者のアンケート結果集計と共にココニコの担当者へ報告した。

－2留意点

＊様々な場面に気を配る

①けがの想定

＊会場の実習台は小柄な小学生には少し高く、中が見えにくい状況も生じ、調理器具によっては火傷の可能性があるという、事故の想定に十分気を配るように念を押した。

②参加者の満足度

＊参加者が出来るだけ均等に参加できるように、状況を見ながら調理作業の分散、誘導した。

＊会話を交わしながら楽しい雰囲気を演出するように目配り気配りを課した。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

－1. 評価

① 参加者の評価：小学生 3～6年生対象だが、参加者は 4 年生が比較的多い。

アンケート結果は毎回「楽しかった」「おいしかった」「学生の指導はよく分かった」「次も参加したい」等、学生の励みとなる評価をいただいた。

② ココニコからは、食事を主にした料理教室が少ないから開催回数を増やして欲しいとの声もいただいたが、現在の人数では 4 回が限度とした。

③学生は、初回は緊張して動きがぎこちなかったが、回を重ねるうちにゆとりが出るようになってきた。子どもたちの協力にも助けられて打ち解けていき、声掛けも増えて、笑顔で指導することができるようになった。回数を重ねることは大きな実りをもたらせてくれることが分かったようだ。

－2. 改善点

① 年度初めの始動が遅く、時間の調整が忙しいときがあった。

セミナー編成が決まった時点から献立等の候補の課題を与え、新学期開始時からスムーズに試作に進めて行くようにしたい。

② 事故には気をつけていたが、初回(7月)にフライパンの端で火傷をした子がいた。

フライパンで魚を焼く場合、小柄な小学生にはキッチンが高く、フライパンの端に腕が当たったりして火傷をする子が数人出てしまった。

火傷等の事故の想定を強く意識しながら、キッチンの下見の際その点をチェックし、献立や調理方法に身長を考慮に入れる必要がある。また、救急用品の準備が必要である。

③ もう一つのプロジェクトとの活動の日程配分を綿密に計画する必要がある。



イワシの手開きの指導



小豆あん作りと豆腐切り方指導

以上

「豊橋産の野菜と米粉を使った焼き菓子の開発」プロジェクト

担当 朝倉 由美子

1. プロジェクト概要

豊橋は農業が盛んで全国一を誇るキャベツや大葉など、多くの農作物が生産されている。しかし、現代の食生活の中では野菜は嫌われる食品となり、摂取量が減っている。そのためいろいろな健康障害も報告されている。また、洋食化により主食の米の消費が減り、食料自給率の低下を招き、米農家の減少へも影響している。

現在、学生は調理師の調理実習等の授業中で、高騰し始めている輸入小麦の分野への活用が進んでいる米や米粉をテーマとして研究を続けている。一方、セミナー活動テーマでは「野菜の摂取量を増やす取り組み」を掲げており、この地域で調理を学ぶ学生として、米粉と豊橋の農産物（主に野菜）を組み合わせた新たな製品を考えて、国産や地産地消の視点から、地元豊橋の農産物への関心を高め、また豊橋の農産物の6次産業化への提案の一つにしたいと取り組みを始めた。最近野菜を使った菓子類も注目されているので、まずは日持ちのする焼き洋菓子を考案することとした。

試作と試食提供の市場によるアンケート調査から今後の製品化への問題点の検討を行い、製品化実現に向けて経過体験を重ね、創造力と実行力の向上を図ることを目的とする。

市場調査には農材や野菜生産販売等を広く手がけている株式会社イシグロローイングの店内カフェ（くくむガーデンカフェ）の協力をいただいた。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

「野菜の活用範囲を探る目的で、基本的な焼き菓子の何を置換できるか考え、新たな焼き菓子の創造を行う。」という目標の中での課題を与えて検討させている。

洋菓子には輸入製品を使用せざるを得ないものが多いが、国内で調達できるもので充当できないかと考え、今年度はアーモンド粉をおからで置換することで、その配合等を試作しながら、検討を進めている。味やテクスチャー等において同等には届かないにしても、国内産、地産消費のコンセプトを具体化するための試作を進めていく。

***焼き菓子の候補:**教員から油脂を控えて、硬いが噛むほどに味が出て来る菓子ので、「噛む」を意識した間食のビスコッティを提案した。

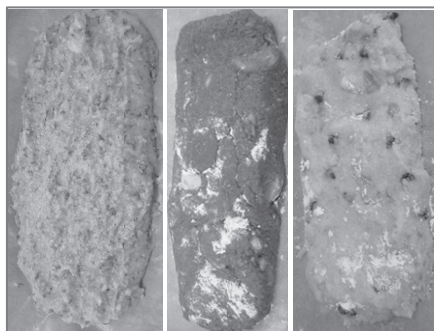
***配合と加える野菜の選択:**学生の中からいくつか提案させた。その結果、「大葉」「人参」「牛蒡」「生姜」「玉ねぎ」等を試作に挙げた。副剤として人参にチョコチップ、牛蒡にはココアと一緒に混入させた。

課題①野菜の大きさやおからの混入量等の検討。

手で刻む、フードプロセッサー使用、混入手順について提案させて試作を行った。

おからは市販のまま、もしくは空煎りして水分を減らしたものなどの試作と製品の比較。

◆初回試作



焼成後、
カットして
再焼成



・切りにくく、大きさの統一が難しく、カットロスによる無駄が出る。
・噛むほど味は出るが、市場向けでは硬すぎる。

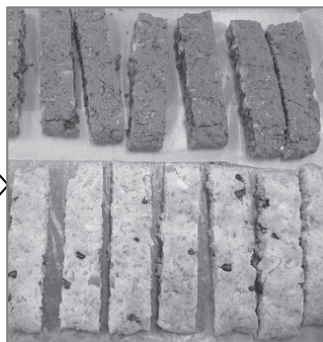
課題②量産する場合の成形に伴う問題点

カットロス、見栄え、噛み応えなどを変えて試作を繰り返した。

◆再検討後の試作



ナッツを砕いて
混入。薄くして
焼成カット後、
再焼成



- ・切り易くなり、大きさもほぼ統一できた。
 - ・硬さも噛みやすくなった。
- ⇒市場調査品とした。

課題③市場調査での情報収集

製品化に伴い、調べることは何か、項目を挙げてアンケート用紙を作成させた。

製品名を「野菜（ベジタブル）を食べて！（方言で食べりん）」というメッセージをこめて「ベジタリン娘」と名づけて調査に向けての製品への愛着を持たせた。

『ベジタリン娘』アンケート用紙

…噛めば噛むほど味がでます！

豊橋創造大学短期大学部 キャリアプランニング科（調理師コース）朝倉ゼミ

私達は米粉をテーマに研究しています。

米は自給率の高い穀物で、小麦粉に代わるものとして活用が期待されています。

また、東三河は農業が盛んなので、野菜と米粉（粉の70%）を使ったお菓子を考えることにしました。

今回は油分をほとんど使わないイタリアの焼き菓子「ビスコッティ」をもとに考えました。

本来の材料のアーモンドプードル（粉）の代わりにおからを用いることで食物繊維がアップし、カロリー控えめなお菓子となりました。

『野菜（ベジタブル）を食べりん』というメッセージを込めた名前にしました。

まだ開発途中ですので、製品向上のためにアンケートにご協力おねがいいたします！

・記入年月日	平成 年 月 日()		
・年齢・性別	() 歳 男性・女性		
・何味を召し上がりましたか？	にんじん	しそ	ごぼう
・野菜の味は活きていますか？	はい	いいえ	
・野菜の量はどうか？	多い	ちょうどよい	少ない
・おからは気になりますか？	気にならない	気になる	
・硬さはどうか？	硬い	ちょうどよい	軟らかい
・形は食べやすいですか？	食べやすい	食べにくい	どちらでもない
・甘さはいかがですか？	甘すぎる	ちょうどよい	足りない
・販売されたら買いたいですか？	はい	いいえ	
・飲まれたお飲みものは何ですか？	()		
・お飲み物と合いますか？	合う	合わない	どちらでもない

▼その他…

① ニンジン・シソ・ゴボウの他に欲しい野菜や味について挙げてください。

② 全体についてご意見をお願いします。

貴重なご意見ありがとうございました！



市場調査中：くくむガーデンにて

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

本年度からの試みであるため、本年度はビスコッティ「ベジタリン娘」の試作と市場調査までに留まった。70 枚程度の試作品を持参し、週末の午前から昼にかけて約 3 時間程度、学生が直接来客に説明しながらアンケートへの回答を依頼した。2 回の学外での市場調査によるアンケート結果を参照されたい。

2 種のアンケート結果からは来場者の学生への応援も含まれているようだが、混入野菜によっては野菜が生きていない、また硬さや製品化に付いては 3 分の 1 が負の回答であったため、今後の再検討課題となっている。市場調査には 3 種の内、大葉入りを 7 月半ば、人参入りを 8 月半ばに行ったが、残り一種の牛蒡に関しては次年度への課題として残ってしまった。

取り組み自体には未知の製品作りに学生は意欲的であったが、壁も多いことを経験した。

学生からの今後への反省と課題が出された。

＊硬さを変える。→さっくり感が出るように油分を加える。

＊形を変える。→〇〇サブレのような大きな 1 枚型にする。

＊おからの配合方法や量の検討。→カットする時の崩れ、パサパサ感を減らすことができないか。

＊別のものを取り上げる。→ビスコッティにこだわらず、例えばしっとりした焼き菓子の試作も進めてはどうか。

セミナーではもう一つの「こどもクッキング」のプロジェクトも並行して進めているために、時間的なゆとりが無かったこともあるが、次年度も同様の状況であるため時間配分等にはしっかり検討したい。

今後は別の焼き菓子も視野に入れつつ、授産所等への製造依頼に向けての取り組みも検討して進めていく予定である。

「ベジタリン娘」市場調査アンケート結果

●アンケートの結果● 7月、8月実施

シソ(大葉)入り

7月17日(日)10:30～15:30頃 実施 (人)

野菜の味は生きてますか？	はい 47	いいえ 7
野菜の量はどうか？	ちょうどいい 45	多い 2
おからは気になりますか？	気にならない 51	気になる 1
硬さはどうか？	ちょうどいい 41	硬い 13
形は食べやすいですか？	食べやすい 47	食べにくい 1
甘さはいかがですか？	ちょうどいい 43	甘すぎる 5
販売されたら買いたいですか？	はい 36	いいえ 16
お飲み物と合いますか？	合う 38	合わない 6

人参とチョコチップ入り

8月13日(土)10:00～12:40頃 実施

野菜の味は生きてますか？	はい 19	いいえ 39
野菜の量はどうか？	ちょうどいい 36	多い 1
おからは気になりますか？	気にならない 57	気になる 3
硬さはどうか？	ちょうどいい 43	硬い 19
形は食べやすいですか？	食べやすい 53	食べにくい 3
甘さはいかがですか？	ちょうどいい 58	甘すぎる 2
販売されたら買いたいですか？	はい 37	いいえ 18
お飲み物と合いますか？	合う 46	合わない 2

以上

豊橋の祇園祭を考えるプロジェクト

担当 今泉 仁志

1. プロジェクト概要

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の後、全国に自粛ムードが広まる一方で、祭りなどによって活性化をはかろうという動きがあった。今年、全国の夏祭りはどうなるのだろうか。祭りは、街の活性化とどう関わりがあるのだろうか。そんな問題意識から、地元豊橋の代表的な祭りである豊橋祇園祭を題材にして、研究してみることにした。

今回のプロジェクト運営を通して、学生に学んでほしいことは、以下のとおりである。

- ものごとを進める上で、プロジェクト的発想が大いに役立つこと
 - (1) 計画することの重要性
 - (2) 全体を見通し、段階的に進めていく考え方
 - (3) PDCA サイクルを回すこと
 - (4) メンバー間でコミュニケーションをとる重要性

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

- プロジェクトにおけるタスクの考え方を教え、考えられるタスクを以下のように皆で書き出した。
 - 今年の各地の夏祭りの実施予定、例年との変化をネットで調べる。
 - 京都の祇園祭を調べる。
 - 各地の祇園祭を調べる。
 - 豊橋の吉田神社祇園祭を調べる。
 - 手筒花火、打ち上げ花火、頼朝行列
 - 今年の吉田神社祇園祭はどうなるのか。規模はどうか。
 - 祭と町内会との関係
 - どういう形で、祭りが維持されているのか。
 - 町内の人は、どれくらい熱くなっているのか。
 - 自営業の人、サラリーマンの人は、どうかかわっているのか。
 - 今後も受け継いでいかれるのか。
 - 何か、課題はあるのか。
 - 町内会の人のお話を聞きに行く。
 - 実際に手筒花火の見学に行く。

タスクを分担して調べるように指導した。

- iPad の「プロジェクト管理システム」を活用した。必要なタスクをアップし、議事録を記入したり、資料ファイルを保存していった。チャット機能も活用し、メンバーの意思疎通をはかった。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトの評価

手筒花火奉納の日である 2011 年 7 月 15 日(金曜日)を目標にして、プロジェクトを進めた。目標の日時がはっきりしている点では、やりやすかった。プロジェクト活動の時間が限られているので、ゼミ時間外の情報収集は、教員が手助けした。iPad を活用し、情報共有が円滑に進められたのはよかった。

学生の感想をいくつか列挙する。

- ・祇園祭というものが、新鮮に感じられた。
- ・手筒花火は、まわりで見ている人達との一体感を感じた。
- ・手筒花火の見学は、人が多いし、暑いし、蚊に刺されるし、大変だった。
- ・豊橋伝統の手筒花火はこれからも続けていってほしい。

プロジェクト運営の課題

- ・学生に積極的に関わらせるのは大変である。
- ・ゼミの時間(水曜日1限目)と課外活動のバランス
- ・学生間の温度差、協力関係の確立

3.2 プロジェクトの改善点

- ・豊橋の祇園祭は歴史が古いので、いまだに「男の祭り」の面が残っている。特に、手筒花火については「女人禁制」の面が強く出ていた。そういった点からは、女子学生向きのテーマではなかったかもしれない。
- ・人混みが嫌いだったり、花火もそれほど好きでない学生がいた。

来年はまた別のテーマを検討したい。

■以上。

「ライスフラワー」プロジェクト

担当 木下 賀律子

1. プロジェクト概要

日本の食料自給率は40％程度にまで低下し、食生活の変化に伴い我が国の主要穀物である米の消費量もピーク時の半量になるなど、日本人のコメ離れは確実に進んでいる。

地元、三河・遠州地域は、日本最大の農業生産拠点であり、「地産地消」の動きは盛んである。近年米については、微細粉に加工する技術が開発され、従来小麦粉で作られていた食品のほとんどを、米粉ならではの長所を活かす形で作ることができるようになってきた。

本「ライスフラワープロジェクト」では、「米」を主とした料理や、最先端の技術でつくられる「米粉」を利用した料理・スイーツの調理法を研究し、創造祭においてその作品展示やレシピを広く一般に公開するなどの活動を通して、「米粉」の魅力を広め、ひいては「米」の消費拡大に寄与することを目的としている。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本プロジェクトの実施にあたっては、学生が自ら進んで活動し、いろいろなアイデアを出し、メンバー全員が協力し合いながら成果をあげることに留意した。

普段のプロジェクト活動で留意した点は以下のとおりである。

- ・辛抱強く練習すれば、調理技術も向上し、それが自信につながることを経験すること。
- ・調理から片付けまでの段取りを考え、手際良く行動できること。
- ・最終的な仕上がりをイメージしながら、途中のプロセスを仕上げていくこと。
- ・素材の違い、種類によって味や仕上がりによどのような結果が出るか、理解すること。
(丹波産と北海道産の大納言小豆を煮て、餡の色、艶、テクスチャーを比較するなど)
- ・切る・煮る・焼くなどの基本調理の再確認。料理と五感の関連について学ぶ。

米粉フェアに向けてグループワークとして留意したことは、以下の通りである。

- ・お米の料理、米粉の料理、米粉スイーツの各分野をどう分担するか
- ・お互いに各自のテーマを研究し、グループでレシピの共有化を図る
- ・最終表現としての作品のディスプレイをいかに効果的に演出するか話し合う
- ・ポスターの作成(チラシ・案内含む)
- ・調理室全体及び廊下の飾り付け方法
- ・料理講習に向けてのメニュー検討、わかりやすいレシピの作成
- ・料理講習のリーダーとなるための練習(調理法の把握・話し方・声の大きさ・間の取り方)
- ・当日のタイムスケジュールの作成について、意見を聞く
- ・材料注文の仕方(重複する材料については、話し合いの上で共有する)
- ・それぞれの米料理について調査研究(A3の用紙にて発表)し、困ったことがあれば、助け合う

米粉フェア当日は、お客様を迎える側として、明るくにこやかに親切に接するように指導した。

- ・会場全体の雰囲気をなごやかで、にぎやかなものになるように皆で努力した。
- ・小さな子どもも含め家族全員を受け入れ、楽しんでもらう事が出来るようクイズなども取り入れた。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクト実施に対する評価

これまでの発表は、調理作品の展示と調理方法のデモンストレーションを主とした作品展であった。しかし今回は、「SOZO COOKING STUDIO」と銘打って、来場者にもデモを見ながら実際に料理講習会に参加して頂いた。

講習会後に業者から無償提供して頂いた米粉を差し上げ、家でも手軽に米粉調理が復習出来るように配慮した。何よりも、全員で和気あいあいと楽しく実施出来たことが、最も喜ばしい点である。

また本学で調理師を取得した卒業生達が、顔を見せてくれるよい機会にもなっている。

プロジェクト参加学生の感想で象徴的なものは、「自分たちが調理する楽しさを、お客さんにも共有してもらえたと思う。」というものである。

その他、参加学生の全員が米粉講習会のリーダーを担当したことから、「皆の前に立った時、緊張感で足がガクガク震えたが、馴れるに従い人前で話す快感を味わうことが出来た」という意見もあった。

創造祭の「お米フェア」に対する参加者の意見をいくつか紹介する。

- ・手軽にできる料理であり、普段のメニューに加えてみたいと思った。
- ・難しいという先入観をもっていたが、実は簡単にできることがわかった。
- ・小麦粉に対して、アレルギーを持っている子どもに良いと思った。
- ・説明を聞くだけではなく、実際に作ってみて、よく分かり理解できてよかったです。
- ・目で見て楽しめ、調理に参加して楽しめ、食べてみて楽しめ、とても楽しかったです。

3.2 次年度に向けた改善点

- ・今回初めて実施した、「参加者にも実際に作ってもらう」という企画は大変に評判がよかったので、来年度も踏襲したい。
- ・次年度は、テーブルコーディネート技術も含め、「米粉のスイーツとお茶」といったテーマを考えている。
- ・今回は手土産のスイーツなどを用意したが、模擬店で売ってほしいという要望もあった。学生の労力も考え検討してみたい。レシピと共に販売すれば、米粉普及により役立つのかもしれない。
- ・個別のテーマでの講習会開催の希望があったので、検討してみたい。

■以上。

防犯プロジェクト

担当 千賀博巳 中島 剛

1. プロジェクト概要

学生たちが生育暦を振り返る中で、人との係わりの中で働いていく意識が希薄になっていることがわかり、人のために働く意識と意欲の向上を図ることが必要であると考えた。そうした中で地域の安全・安心のためにどのような取り組みができるか検討し、防犯ボランティア活動を一つの目標とすることを決めた。防犯ボランティアチームを発足し、その活動を通じて地域の安全・安心に貢献するとともに、自ら働く意識と意欲を高めることを目標とした。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

本プロジェクトの実施にあたっては、学生が自ら進んで活動することを重視し、今まで自分が係わっていなかった社会を知るとともに、社会で働く人との交流を通じて学生自身が成長できることを目標とした。

防犯チーム CTS (Clean Team SOZO) を発足させ、多くのイベントに参加したが、当初の目標である「人のために自分は何ができるか。」というボランティア精神を学生が常に持って行動できるように、指導助言をした。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトの評価

学生は大きく分けて二つの活動をした。「学校周辺の地域の安全・安心に寄与できる活動」と「防犯チーム CTS の活動」である。

学校周辺の地域の安全・安心に寄与する活動では、地域を巡回しながら清掃活動とあいさつ運動をしながら地域の人との繋がりを大切にするとともに、地域の防犯上気をつける場所などの確認をする活動を行った。

CTS の活動では、駅前での防犯キャンペーンや少年の立ち直り支援のための農業体験活動に参加するなど、今まで学生が経験することのない場面や多くの人たちとの交流を通じて、幅広い地域の人との交流が図られた。

以上の活動を通じて、当初は遠慮がちであった学生がより積極的に行事に参加するようになるとともに、多様な価値観の多くの人との交流を通じて、学生自身の社会性と価値観の構築に役立った。

学生の感想にあった「さまざまな活動を経験するなかで、私は防犯対策のチラシ配りや呼びかけなど、小さなことの積み重ねが地域の安全・安心という大きなものに繋がると気付きました。」は、このプロジェクト活動にとどまらず今後の生活のなかできっと生きてくるものと思われる。

3.2 プロジェクトの改善点

防犯プロジェクトの活動は、授業後の夜6時、7時からや土曜日、日曜日での行事が多かった。このため、学生のスケジュールの調整がうまく行かなくて参加者が少ない行事もあった。年間の予定表が早めに決まれば、学生たちの活動もより計画的かつ積極的にできると思われるので、来年度は年度当初の計画をしっかりしていきたい。

また、今年度は CTS の活動が多かったが、来年度は地域の巡回活動を充実させながら地域の防犯マップの作成をするなど、地域の人たちとのつながりを重視した活動をしていきたい。

プロジェクトテーマ

担当 寺本和子

1. プロジェクト概要

愛知県の東三河地方は、多様性に富んだ地形を有し、その結果、東三河の自然もまた多様である。しかし、これら多様な生物の現状は決して楽観できない。生息地の破壊、生物種の持ち出し、また逆に生物の持込または侵入、地球温暖化の影響等々、東三河の自然にも変化の兆しが見られる。

私たちプロジェクト参加者は、NPO法人東三河自然観察会の指導を受けながら、まず、東三河の自然の現状を知ること努めた。その後、地域の人たちを中心に、自分たちの知りえた情報を伝え、少しでも東三河の自然を守ることにつながればという期待を持って、ホームページを立ち上げ、観察結果を公表した。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

実際野外へ出て、自然を肌で感じてもらい、自然を身近に感じ、自然に感動する感性を養うことに努めた。

ホームページの作成に当たっては、基礎的な技術については教えたが、デザイン等はすべて学生たちに任せた。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

学生の野外での自然観察の機会は3回しかなく、観察当日は楽しんでいた様子であったが、自然に対する感性が養われたかどうかは疑わしい。

また、社会人としてのNPO法人東三河自然観察会の人たちとも交流の機会があったが、人格的な影響を受けるまでには至っていないと考えられる。今後は、より頻繁に交流を図るように努めたい。

プロジェクトテーマ

担当 長谷川 正志

1. プロジェクト概要

- ①全員で合格を目指す「医療秘書検定」
- ②韓国医療視察

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

- ①については、授業、補講、個別学習を実施した。
- ②については、ゼミの授業の中で韓国についての基礎知識を教えた。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

- ①については 10 年間実施、②についても今年で 5 年目ということで、新規のプロジェクト企画という事ではない。今後についても新規にプロジェクトを立ち上げるつもりはない。

※ページ数の制限はございません。

医療機関の貼り紙適正化プロジェクト

担当 細谷 邦夫

1. プロジェクト概要

本年度から文部科学省に、本学の「持続型職業人 SOZO プロジェクト」（以下 J S S P）が採択され、以下のような取組を実施することとなった。

- ・メンタルタフネスの育成
- ・実践的スキルのブラッシュアップ
- ・ユビキタスキャンパスの始動
- ・大学コミュニティを活用した社会人基礎教育の展開

このうち「実践的スキルのブラッシュアップ」について、細谷セミナーでは I T を活用した医療事務をテーマとしているので、実際の医療機関にお邪魔して、医療機関にも患者さんにも役に立つことが無いかと考え、本プロジェクトを立ち上げるに至った。

医療機関内の貼り紙はたくさんあって見た目にも汚いだけでなく、患者さんに対する情報伝達としての役割も果たせていないという印象があった。

JSSPではA1サイズが印刷できる大判プリンタを購入したので、これを活用して もっと患者さんに見易いような貼り紙にできるのではないかと考え、以下の医療機関の協力を得て、どのようにすればいいかを考えることにした。

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

貼り紙を考察する事前準備として、院内掲示に関する関連法規を勉強し、法的に必須とされる掲示内容について学んだ。

本プロジェクトで学生に学んで欲しい事として医療事務実習だけでは得られない経験をするために、「患者目線」に拘った。そのために、まずは協力医療機関を訪問し、実際の貼り紙がどれだけあるかを確認し、患者さんの立場になったときに本当に見やすいか、本当に必要な情報かを踏まえて、検証することとした。

現地調査の結果、同じような情報、即ち料金に関するもの、医療機器に関するもの、院内でのお願い事項等のグループに分け、担当者が貼り紙のデザインを考えた。

留意した点としては、自分が患者だったらどう思うかを常に意識させ、極力学生自身の頭で考えさせることであった。

情報の分類は学生だけでは難しい部分もあるので、折を見て助言はしたものの、殆どは学生達自身で作成できた。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

前述のとおり、折を見て助言はしたものの、殆どは学生達自身で作成することが出来た。当初は相当助言をする必要があると考えていたが、言い意味で裏切られ、学生達の底力を感じることができた。

持続型職業人 SOZO プロジェクト
成果報告書（教員）

成果発表においても、当ゼミナーだけでなく、全ての学生が同等と発表する姿に、教員が学生には出来ない、と勝手に思いこむことがどれだけ学生達をスポイルしていか実感した。

来年度への課題としては、自分自身ももっと学生の力を信じるということと、医療機関への実地調査等の時間配分を再考することである。

特別研究セミナーの限られた時間で実施するため、医療機関へのフィードバックが思うようにいかず、医療機関にもご迷惑をかけてしまった。

今年度やり残した部分もあるので、後輩に引き継ぐ形で、継続する予定である。

プロジェクトテーマ

「I ♥ ROZE プロジェクト」

担当 村松 史子

1. プロジェクト概要

東三河の代表的な産業でもある花農家（薔薇園）と連携をして地域の産業の実態を知ることが基本としてプロジェクトを考えた。

薔薇は学生にとっても興味あるものと考えられ、の販売促進の学生コンサルタントを目指し、販売の工夫・利益を得る事の大変さを体感し考えさせる。

その実施内容として

- ①新鮮な薔薇の販売ルートを学び地産地消のシステムを考えさせる。
- ②SOZOブランド商品のマネジメント。（新商品の開発）
- ③バラについての研究を学園祭に発表し、販売をする。
- ④学生の自主性を育てる。
- ⑤売上利益を東日本大震災の復興義援金とし、寄付を行う。

<外部提携先>

- ・「Watanabe Rose Nursery」渡辺農園 渡辺 真臣 氏
〒441-3602 田原市八王子町道上18 TEL 0531-37-0117
- ・ガーデンガーデン株式会社 坂井 奈津子 氏
〒441-3147 豊橋市大岩町字境目35-8
- ・LACLE FLORISTS 代表 市川 香織 氏
〒440-0896 豊橋市萱町14 八千代ビル1F

2. プロジェクト実施の指導方法・留意点

田原市の薔薇農園とプロジェクトを組む場合の大きな問題として、豊橋・渥美間の距離があった。問題を解決するためにはどうしたら良いかを初回のプロジェクト会議に投げかけたところ、学生たちが「ブログ」での情報交換を提案してきた。

5月下旬にブログの立ち上げをした。その「ブログ」を通して渡辺氏から薔薇の生育状態や現状の咲いている薔薇の写真などが書き込まれた。リアルタイムに情報が交換出来、学生たちにとっても身近に薔薇を感じることが出来た効果的な方法となった。

また、現実に薔薇園の見学をする事によって、学生たちが薔薇に対する想いを深める結果となり、今後何に取り組めばよいかが明確になった。

3. プロジェクト実施に対する評価・改善点

3.1 プロジェクトの評価

このプロジェクトは、学生が自ら発想し、実行することを目的としたことから、指導は、助言程度を心がけた。その結果、学生たち全員が一丸となって計画、立案、実施し、成果発表につなげたことが何よりの成果と考えている。

さらに「学生同士の信頼感や仲間意識の深まった」「接客が向いてないと思った。薔薇を売る体験を通して、仕事とはどういうものかを知ることが出来た」「協調性もついた」「リボンの縛り方は最初は難しかったが簡単に出来るようになり嬉しかった」などの声が上がり、仕事への興味が沸いてきたことが感じられた。

また、「Watanabe Rose Nursery」渡辺農園の渡辺氏、ガーデンガーデンの坂井氏、LACLE FLORISTS の市川氏等の無欲の協力が得られなければ成り立たなかったと思っている。その結果として、当初の目的、渡辺、坂井両氏の厚意をいただき売上金全額 20,460 円を東日本大震災復興支援として寄付。最終目的を果たすことが出来た。（中日新聞：24 年 1 月 12 日付に掲載）

3.2 プロジェクトの改善点

- ・ 薔薇の販売に貢献すると伝えたが、取組内容を明確に告げられなかったこと。
- ・ 「青い薔薇」の販売のみにとどまり、新たな発想まで進められなかったこと。
- ・ 学園祭には、提携会社の負担が大きかったこと。

などを今後の課題とし、長期のプロジェクトと考えて取り組んでいきたい。

※ページ数の制限はございません。